

教示を深謝す。

●浮游性紐蟲

(珍奇動
物 其六)

(熊谷三郎)

紐蟲と云へば大概海産で、底の泥等に潜つて居るか、又は海藻等の間に住んで居る者であるが、池田博士の嘗て研究された *Neuromeres* とか又は *Neuromeres* 等の様に淡水中或は濕地に生活して居る者もあり、又高倉先生の記載された *Neuromeres* の様に寄生若しくは之に類した様な生活をする者もある。茲に云ふ浮游性紐蟲の如きも唯其習性が珍らしい者であるのみでなく、比較的稀にしか採集されぬ者でもあり、其構造及分類上の位置に於ても大分特別の點がある様である。

挿圖一及二に出したのは共に浮游性紐蟲の例である。

どちらも相模灣で採集された者で、採つたのは外人であるが吾等の目に觸れる見込の最も多い者であらう。

挿圖の一は *Pelagoneuromeres mosleyi* BIRGER と云ふ種類で、一八七五年六月相模灘の七五五乃至四二〇フアズムの點で「チャレンジャー」號のトロールに入つた者で、乗組んで居た WILLEMORS STUHN 氏が發見し、MOSLEY が親しく觀察した者である。之は浮游性紐蟲の第二番目に採集された標本で、而も此種は此時以後一も採集された事がない。

従つて此種は唯當時不完全な標本によつて表面的に觀察された切りであるから、體制等の不明な點が多い。此圖にある様に體縁に縊れがあるのは、即ち標本が壊れかゝつた證據である。

長さは一三種幅一一種厚さ一種位の小さな者で無色透

明、唯腸管のみが黒褐色に見えた。

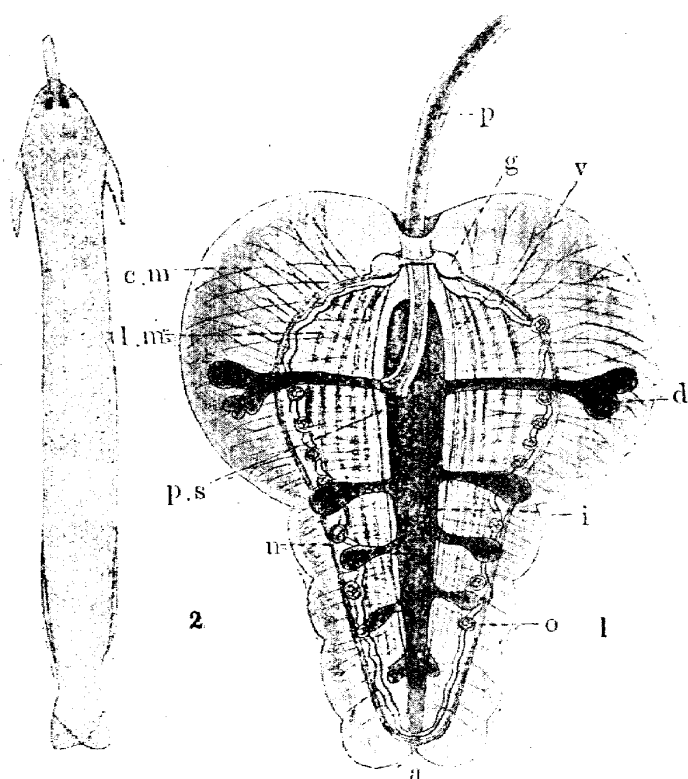
體の構造は略々圖によつて分る通り、體の前端は廣く圓くなり後端は稍尖る。前端に吻鞘の開口があり其腹面に之と獨立に口が開く、後端には肛門(a)がある。消化管の中腸には五對の枝(a)が左右に出る、其内第一對は最長く先で分岐する。第二對以下次第に短い。吻(p)は體の略二倍の長さ、針を認める事が出来なかつたと云ふ。吻鞘(p.s)は體の後端に近い處迄達して居る。腦(g)では背側の球が著しく腹側の者より大きく、之より體の側縁に沿うて神經幹(n)が出で後端で相連絡する。此神經幹より左右に細い神經が多く出て居る。血管(v)は神經幹に沿うて多少廻り乍ら走り、後端で左右連絡し、前端腦の直後では特別に太くなつて居る。背血管もなく又横の連絡もない。筋肉は環狀に走る纖維(m)と縦に通つて居る纖維束(l.m)が著しい。採集された標本は雌で卵巢(o)が數對神經幹の内側に沿うて並んで居た。

日本近海から採集された浮游性紐蟲が今一種ある。之はアラン・オー・ストン氏の三崎附近で採集した六個の標本で、氏から H. HEATH 氏を経て E. A. FOSHA 氏の手に入り同氏が研究して *Neuromeres japonica* と云ふ名で *Zoologische Anzeiger*, 1912, p. 50 に記した者である。處が此頃浮游性紐蟲のモノグラフを書いた BRINKMAN 氏は之を從來から廣く知られて居た *N. mirabilis* VERRILL と同一種とした。

N. mirabilis VERRILL は挿圖二に示した通りの形で頭部は卵形、其後で少しく狭まり、體の中部では側縁が略平行し尾の様な部分で又狭くなり、それから扇形に弘がる。胴の後部及尾部には鰭の様な附屬物がある。それから雄には頸部に圖の如き觸手が附いて居るが、雌には之がない。大きさは長さ

雄二一乃至四二種、雌一七乃至四五種、色は生きて居る時には美しい紅色乃至橙紅色で觸手や鰭は無色である。

内部の構造は圖無しでは分り悪いから簡單にするが、腸には前の種よりも多數の枝管があり、又中腸よりは前方に向ふ盲腸が數對ある。吻鞘は尾部附近迄達し、吻は體より少し長く、小さな針を具へて居る。血管は側血管の外、背血管がある。眼及頭感器は共に無い。精巢は頭部にかたまつて腦の附近から觸手の基部迄に亘つてあり、其數、十二三對から二十三對迄、卵巢は之に反し體の側面の全長に亘つて腸の枝管



1. *Pelagoneurites moreleyi* BÜRGER.

a. 肛門 cm. 環狀筋 d. 腸の枝 g. 腦 i. 腸 lm. 縱走筋
n. 神經幹 o. 卵巢 p. 吻 ps. 吻鞘 v. 血管

2. *Nectonemertes mirabilis* VERRILL.

吻の基部に對をなす斑點は腦 (二倍余)

の間にある、其數二十三對。此種は分布の廣い種であるが、多くは太西洋から採れ、太平洋方面では三崎附近の外カリフォルニア近海から採集された。深さは千米位或はそれより深い。三崎附近のは深さは分らない。浮游性紐蟲の特徴及分類上の位置 浮游性紐蟲の類で現在知られて居るものは十八屬三十餘種、總て

M. SCHULTZE の *Enopla*, *HERRICHT* の *Hoploneurini* に入る。BRUNN-MANN は此目を分つて *Monostilera*, *Polystilifera* の二つにして居る。之は其吻にある針の形から名づけた者で *Monostilera* と云ふ方は針が臺の様なつた部分の上に唯一つある者、*Polystilifera* は比較的小さな針が臺の上に多く並んで、全體多少軟體動物の齒舌に似た様な形をして居る者である。浮游性紐蟲は總て此の *Polystilifera* に入るが、浮游性でない者では *Drepanopodidae* の者が之に入る(紐蟲の目に就ては本誌二六卷八七頁、又吻に就ては同十七卷一二三頁を參照せられたし)。浮游性紐蟲の全體の特徴を

プリンクマンに従つて簡単に記すと

『浮游性、頭感器、排泄器、吻鞘の枝管及血管の横の連絡なし精巢は頭部に扁在す』

其外浮游性生活に伴ふて全形が扁平になり、鰭の如き附屬物が生じ、原來の筋肉は退化し游泳の爲めの筋が発育する傾があるとか、又は腸の枝管の數の減ずるとか、腦の背面の方の節が小さくなつて居るとか、感器が一般に甚しく退化して居るとか、卵巢の中に發育する卵の數が非常に減じて居るとか、種類によりては一般の紐蟲には全く缺けて居る陰莖の如き者が發達して居るとか云ふ様に注意すべき變化を生じて居る。

(駒井卓)

●話の種

●臺灣のミカド雉は阿里山新高山方面に限りて棲息するものゝ様に思はれて居たが中央山脈一帯の高地海拔七千尺内外の場所には偏く分布して居るものらしく、南投廳能高山の中腹で捕へたものは目下新宿御苑に飼育されて居る筈であるが近く予が花蓮港方面の蠻地を跋涉した際、内タロコ、タウサイ蠻人の居住地附近に於て其棲息地を發見した、其當時蠻人と交渉して雌雄一番を五圓で買ひ上げる事に取きめた處が三日間に三番を生擒して呉れた。其後之はよき商賣と思ふたのか蠻人共が續々出動して約五十番を捕へ之を右の價格で買ひ上げて呉れと申込んで來たので大に閉口したが之によつて見れば花蓮港管内の方が其主産地らしく思はれる、其肉も味つて見たが

非常に結構である、斯く豊富に産する事が判明して見れば肉用若くは美術用として人工増殖を計る價值は充分あると思ふ。

●雉と云へば支那方面では羽毛採集の目的を以て金鷄鳥や其他の雉類を大々的に飼育して居るとの評判があつた。合衆國政府は之に多大の注意を拂ひ其眞偽を確むるために調査の歩を進めたが紐育動物學會の鳥學者や紐育博物館の支那探險隊長の雉専門のアンドリユウ氏等によりて其噂は事實無根である事が確められた。雲南の土民は雉を誘きよせるために雄雉を飼育する事があるそうであるが、おとりとなると肉用としては市價五六十錢を普通とするものが一羽二十五六圓に値するので之を大規模に飼育する事は出来かねるそうである。又支那や印度支那では雉の輸出を嚴禁して居るやに聞て居るが之は若し其羽毛が高價に賣買されるとなれば利にさとき支那人は之を濫獲して忽ち絶滅させる恐があるからであらう。

●Oxford Pressの手によりて支那に關する百科全書(The Encyclopedia Sinica)が刊行された。支那研究には非常に便利な書籍であるが其中には博物に關する文献と諸種の記事が豊富に載せられて居るので我々に取つても大に便利である譬へば鳥の欄では J. L. DE LA FLOUQUE が百五十五項に亘りて詳細な記述を試みて居るが其他政府筋から提供した科學的記事が多い。

●滿洲に産する羚羊 (Gazelle gutturosa) の速力に就て